

東村山 長崎のトゲナシグリ

中山町

中山町大字長崎の安藤光さんは、いわゆる昔からのかたい百姓家で、家の前には沢山のウメの木を栽培している。いりには天然ガスがともつていて、湯釜は落つた音をたてゝたぎつてゐる。つるしてある米俵は全く手ぎれいで、美術的な感じがする。本当になごやかな雰囲気満ちた家庭である。

この家の主人光さんの親は、若い頃狩がすきで、獲物をさがして須川べりを歩いているとき、藪の中からトゲのない珍しい栗を見つけた。それで屋敷の口当りのよいところに、大切に移植して一生懸命に手入れしたら、よく成長して四十年生位で直径一尺以上にもなり、毎年カマ

トゲナシグリ

スで三俵づゝ実がなり、附近の人々をおどろかせた。

その頃一昭和二年頃一山形県農業試験場の技師がきゝつけ、写真をとつたり、いろ／＼調べていつたが、間もなく新聞の産業欄に写真入りでつた。こうして世間に紹介されたので、各方面から苗木の注文やタネの問合せが殺到するようになつた。都合よく重吉さんの兄が、仙台で苗木屋をしていたので、このことを相談したが、接木の技術が悪く思うように繁殖できなかったらしい。小学生だつた光さんやその友達が実をまいたが、大きくなるとみんなトゲの生えた実ばかりだつたという。また安行の樹苗屋から穂を送つてくれといわれて、随分送つたが、その頃から安行の種苗カタログにトゲナシ栗が出てくるようになった。それでトゲナシ栗の元祖はうちで、アメリカにも送つたと、父が時々話していたと、光さんは語つてくれた。

現在は三本のトゲナシ栗があるが、いずれも、目通り径六寸前後で、高さ五間位、樹令はおよそ四十年位である。しかし屋敷のかたすみにおつつけられて生えているようなもので、他の木や家屋のかげになり樹勢もおとろえ、枯枝も多くており、実のつきも悪くなつてゐる。こ

の三本のうち、二本は安行のカタログによつて取寄せたものであるが、一本は仙台の叔父が家の親木から直接とつた穂を自分でついだものだそうである。三本とも、葉、イガはほとんど同じである。

イガはトゲナシといつても、学童の頭をバリカンで刈つたようなもので、トゲの痕跡が残つてゐる。しかし針が指にさすようなことはないから、ザクロのように指で皮をむくことができる。また普通の栗にくらべて、三ツ実が非常に少なく、一ツ実、二ツ実が多い。大粒でつやもよく、甘味が多い、なか／＼よい栗だが、中生よりもちよつと遅れぎみである。

須川ぶちの藪の中からトゲナシ栗をみつけたらしい重吉さんも、これを地元で殖やしたその兄さんも、数十年前に亡くなつてしまつた。またこのトゲナシ栗の親木も昭和十二、三年頃、伐られてしまつたが、その子孫の栗の木には、やはりトゲのない実が、毎年少しづゝではあるがなつてゐる。

それで、そのようによくなる栗の木をなぜ伐つたかと聞くと、根元にクサレが入つて、だん／＼抜がるばかりで、用材にならなくなるのを恐れて、惜しかつたが伐つたのだそうだ。

「その板がこれだつす」

と庭の穴ぐらの敷板を持つてきて見せてくれたが、尺巾の板で木目が五分以上も成長している。

今年の夏も、山大学の学生さんがいろいろ

調べて行かれた。町報にも写真入りで出たなどと、ていねいに説明してくれた。

おいとまをして、自転車をつづりながら、つぎのことを考えた。

いまの技術で栽培したら面白いだろう。林業研究会員にも紹介しよう。

なんだかこの地方に名産性がひそんでいるようだ。

(山辺地区林業改良指導員 高橋仁石工門)

△ △ △

トゲナシ栗は遺伝学上にも面白い問題がありそうだ。須川べりでたま／＼見つけた親木は「突然変異」によるものだろう。その親木になつた実(F₁)は全部トゲナシの形質を持つから、優性だろう。しかしその実をまいて、皆トゲアリとなつたというのは、不思議で、トゲナシとトゲアリがある比率で分離してもよさそうに思う。だがF₂を全部まいたわけでもなく、授粉にも他家と自家とがあるからこれは試験してみなければならぬ。

子孫は接木によつたものだから、親の形質をそのまま受けついでたわけで、トゲナシになるのは当然だが、接木してもトゲが出たという話もちよつと聞いた。これも妙な話だ。

岡山県和気町の児玉氏栗樹園のものも、この子孫ではあるまいか。三十年生だが、クリタバチがつき易いとい

(伊藤S.P)

